

在学生および卒業・修了生の声

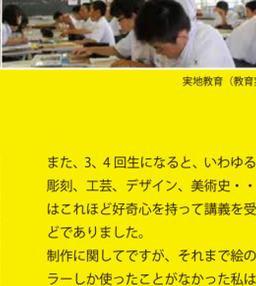
- 平成 25 年度学部芸術コース卒業 (修士課程芸術コースへ進学)
- 平成 27 年度修士課程修了

美術分野 学生・OB の声

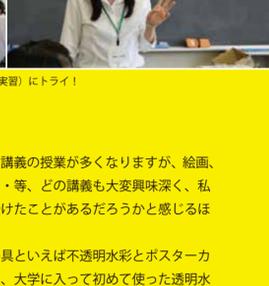
私は子どもの頃から先生という存在に憧れ、そして絵を描くことが好きということもあり、兵庫教育大学学校教育学部の芸術コースに進学しました。高校時代美術の授業はありませんでしたし、特にそういった習い事をしていたわけでもありませんでしたので、美術コースで学ぶことは知らないことばかりでした。石膏や油絵具など、触ったのも初めてといった具合でした。しかし得意分野でなくとも、基礎を学びながら、かつそれぞれ思いおもしろい表現ができるような授業ばかりで実践はすぐに面白くなりました。



卒業制作



実地教育（教育実習）にトライ！



▲主任指導の大西准教授（絵画）とともに  
▼浅海准教授（工芸）とともに

また、3、4 回生になると、いわゆる講義の授業が多くなりますが、絵画、彫刻、工芸、デザイン、美術史・・・等の講義も大変興味深く、私はこれほど好奇心を持って講義を受けたことがあるだろうかと感じるほどでありました。

制作に関しては、それまで絵の具といえは不透明水彩とポスターカラーしか使ったことがなかった私は、大学に入って初めて使った透明水彩の美しさと自由さに感動して、水彩を主に使用していました。作品の規模を少しずつ大きくし、3 回生になるころ自分の制作の目指すイメージがだんだん明確になっていきました。4 回生になってからは、自分の作品が他人にどう見られるのか、評価されるのか、といったことにも関心を持ち積極的に公募展に出品するようになりました。美術コースに所属してから 4 年間の制作で、時には自分でも驚く程順調に筆が進み、時には泣きながらパネルに向かい合っていたことを思い出し、こころ来て良かったと感じています。

本コースの特徴は、1 つの領域にとどまらず、様々な専門の先生方の授業を受けられることにあると思います。受身でいけば面白くなってきたところで講義は終わってしまうけれど、自ら動けば必ず応えてもらえる、多くのことにチャレンジさせてもらえる、そういう充実した環境であったように思います。その中で私は、自分自身や周りにとられすぎないで、もっと自由に表現してもいいんだ、と感じるようになりました。素朴な感想ではありますが、そのように思えたことは私にとって大きな変化でした。昔から図工や美術の授業が好きなのは、そう強く感じたことはこれまでも一度もなかったからです。

美術コースでの 4 年を終えた現在、私は、これからも自分が面白いと思ったことを見逃さず、やってみようと思ったことをそのままにせず、様々なことに挑戦し学んでいけたらと思っています。

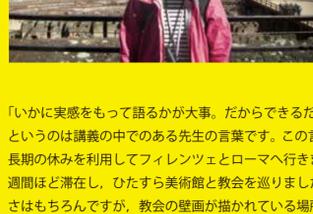
在学生および卒業・修了生の声

- 平成 25 年度修士課程修了 (愛知県刈谷市)
- 

本学大学院生（2012 年入学）

修士課程での 2 度目の学生生活はとても充実したものとなりました。1 年目は、講義と制作が中心となり、美術教育の理論や実践的な内容を学びました。特に、理論的な内容では、これまで経験した具体的な事例と照らし合わせながら理解していくことができました。また、すべての授業を通して美術や教育の「本質とは何か」について考える場ともなりました。

2 年目は研究が中心となり、自分の興味がある事柄に対してじっくり腰を据えて追求していくことができました。研究や論文執筆の経験がない私は非常に苦しましましたが、学校現場で日々の職務に追われていたことを考えると、純粹に自分のためだけに学び追求できることは、とても贅沢なことでもありました。



「いかに実感をもって語るかが大事。だからできるだけ本物を見なさい」というのは講義の中である先生の言葉です。この言葉に背中を押され、長期の休みを利用してフィレンツェとローマへ行きました。どちらも 1 週間ほど滞在し、ひたすら美術館と教会を巡りました。作品の素晴らしさはもちろんですが、教会の壁画が描かれている場所や、作品が生み出された街の様子など、図版ではわからないことも目にするのができ、理解を深めることができました。

普段、美術と接する機会が少ない生徒にとって、教師は「美術の世界」の「入り口」という役割を担っています。教師が「美術の世界」の魅力や、授業の中で実感をもって語り、示していくことは、生徒が美術の面白さを知り、興味をもつ上で必要かつ大切なことです。

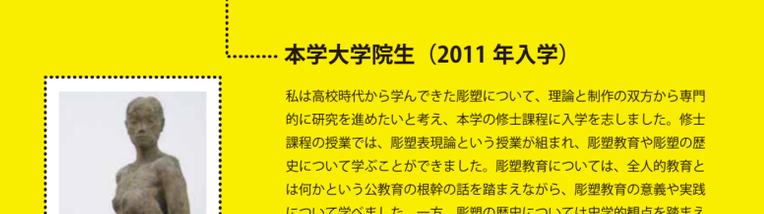
また、この 2 年間は私自身が生徒の立場で、美術分野の先生方から「美術の世界」の魅力や、授業を通して学ばせていただきました。ここで得たことを、今度は実践に活かし、生徒たちに伝えていかなければと思っています。

在学生および卒業・修了生の声

- 美術分野 学生・OB の声
- 本学大学院生（2011 年入学）
- 2005 年卒業 / 現、中学校教諭
- 2013 年修了 / 現、中学校教諭

美術分野 学生・OB の声

学生の進路は他コースに比べ自由で実に様々な選択肢が広いと言えます。学部卒業後、小・中・高の教員になる人、本学や他大学の大学院に進学する人、デザイナーや美術家として活躍する人、企業に就職する人など・・・そして大学院ではこれに加えて、更に本学や他大学の博士課程に進学する人もいます。最近では他コース、他大学からの進学者も多く、全国の公募展やコンクールで入選や受賞を果たし、学長表彰され、奨学金の返還が相当額免除される学生も出てきました。



本学大学院生（2011 年入学）



私は高校時代から学んできた彫塑について、理論と制作の双方から専門的に研究を進めたいと考え、本学の修士課程に入学を志しました。修士課程の授業では、彫塑表現論という授業が組まれ、彫塑教育や彫塑の歴史について学ぶことができました。彫塑教育については、全人的教育とは何かという公教育の根幹の話を踏まえながら、彫塑教育の意義や実践について学びました。一方、彫塑の歴史については史学的眼光を踏まえながら、改めて彫刻とは何かを考えていく機会を得ることができました。また制作の授業では、実際にモデルを前にしながら観察し制作を行います。私は彫刻の境の組立とはなにか、彫刻とは何かを考えながら胸像の制作を行うことができました。そして本コースでは専攻した領域に限らず、絵画、彫刻、工芸、デザイン、美術史学、美術教育の専門の先生方の講義を受講することができ、様々な観点から美術と美術教育について学ぶことができます。さらに、本コースは学生数が比較的不太りない地方大ではあるのですが、恵まれた設備環境にあり、修士課程の限られた時間の中で充実した研究が行えるようになっていてと感じています。本学で学び得るものは、研究を進める上で重要な核となると思っています。多様な領域で学んだものが分野を超えて相互に関わるように、彫塑と美術教育についての考えを更に深めていければと思います。

在学生および卒業・修了生の声

- 美術分野 学生・OB の声
- 本学大学院生（2011 年入学）
- 2005 年卒業 / 現、中学校教諭
- 2013 年修了 / 現、中学校教諭

2005 年卒業 / 現在、中学校教諭

現在、私は兵庫県内の公立中学校で美術科の教員として働いています。私が美術を専攻しようと思ったのは、大学に入学してからでした。当時、自分は何を表現したいのかわからず、まるで制作動機を見つけないために制作をしているかのような状況でした。毎日様々な分野の研究室に出入りし、先生や先輩との会話のなかで知識を仕入れ、多様な考え方に触れられました。機会を頂いては、作品の材料取りや展示作業を手伝い、道具の使い方や梱包、展示技術などを学びました。今振り返ると、恵まれた環境のなかで、幸福の学生生活を送ることができました。現在の研究テーマは、その語がむしろに考え、手を動かしながら進めていた中で、自然と確立してきたものです。そして大学在籍時に培った基本的スキルが現在の職業にも非常に役立っています。



2013 年修了 / 現在、中学校教諭

学部生のころ国語を専攻した私にとって、大学院で美術に転向するには勇気が必要でした。もともと興味のある美術を学ぶチャンスは今しかないのではないかと、決心して飛び込みましたが、そんな私にも先生方は熱心に指導をして下さいました。絵画・彫塑・工芸・デザインといった各分野についての講義や、演習を含む実践的な教育法などの魅力的な授業だけでなく、研究についてもたくさん先生方からご指導をいただくことができました。私は美術と国語の交差する領域を研究対象に選びましたが、そうしたやや複雑なテーマに対して私の意図を十分に理解して、的確な助言をしてくださった先生方のおかげで、その成果を論文として形にすることができました。また、制作設備にも恵まれた広い環境で、ご助言を下される先生方、周囲の友人や先輩方も互いに刺激を与え合う生活を過ごせたことは、私にとって代えがたい経験となりました。現在私は国語科と美術科の教員資格を持ち、中学校に務めています。大学院の二年間で学んだことは教科の枠を超えた財産としてこれからも活かされていくと確信しています。



近年の修士論文題目

- 平成 27 年度
- 平成 26 年度
- 平成 25 年度
- 平成 24 年度
- 平成 23 年度

平成 27 年度 大学院 修士論文題目

- 図画工作科での描画活動における作品および画用紙のサイズに対する意識の考察
- ターナーの風景画における光の表現に関する考察
- メディア・リテラシー教育におけるポストデザイン学習の可能性
- 子どもの造形活動における「みたく」とその機能の有用性について
- 日本における「蝶結びリボン」の定着に関する研究
- 日本の現代パッケージにおける伝統パッケージの有用性
- 中国内モンゴル地域と日本における小学校美術教育の比較研究
- 内モンゴルにおける民族伝統文化を取り入れた美術教材に関する研究

平成 26 年度 大学院 修士論文題目

- 視覚造形芸術にみる「影」に関する諸問題
- (影) をめぐる文化史・美術史的考察の視点から—
- 内モンゴルの美術教育における抽象絵画の視覚に関する考察
- 美術科教育におけるワークショップ型授業の可能性
- 協働学習の視点から見たワークショップ型授業—
- 美術鑑賞教育の定着と改善をめぐる
- 鑑賞教材としての美術科教科書について—
- 中学校美術における皮革教材の可能性について

平成 25 年度 大学院 修士論文題目

- 小学校図画工作科の授業における「感性を働かせながら」についての考察
- 中国における構成教育について
- 閉症のある生徒 A の「ものを並べる、積む」というこだわり行動に着目した造形活動に関する一考察
- 積み木から造形活動へいざなう学習の試み—
- 抽象絵画における印象の変化を手がかりとした鑑賞効果の一考察
- 美術鑑賞教育の定着と改善をめぐる
- 鑑賞教材としての美術科教科書について—
- アートの「拡大」と「縮小」がもたらすもの — 淡路島の事例を中心に—

平成 24 年度 大学院 修士論文題目

- 高村光雲の作品についての考察
- 文明開化期における日本の伝統文化と西洋文化との相克の観点から—
- 「美術科のかたち」の混迷と指導再考に向けた視点案出
- 図画工作科における工芸ジャンルの現状と可能性について
- 図工専科教師の力量形成のための研修モデルプラン構築
- 表現活動を中心とした図画工作科におけるメンタルケア教育の実践と課題
- 発達障害のある児童を含む高学年通級学級を対象として—
- モンゴルにおける現代建築デザインの一考察 — モンゴルと日本の比較研究—
- 「造形遊び」の研究 — 内モンゴルにおける展開可能性の検討—
- <ダヴィッド>にみるミケランジェロの彫刻概念
- ルネサンス期の素描と彫刻技法をめぐって—

平成 23 年度 大学院 修士論文題目

- 図像学・イコノロジーを踏まえたヴィジュアル・リテラシー教育の諸問題
- ボッティチェリ作《春》の研究史を通して—
- 朝倉文夫の彫刻制作に関する考察
- 「彫塑技法」(昭和二十八年～三十一年)を中心資料として—
- 余白の効果について — 尾形光琳筆《燕子花図屏風》を中心に—
- 日本の「美術文化についての理解」を深めるための絵画教育に関する考察
- 中国における彫塑教育の現状と高等学校での彫塑領域の授業実践
- マッスの構築テーマとして—